

## —— 書 評 ——

### 石附実編著『近代日本の学校文化誌』

吉 岡 剛

伊豆半島の下田から西海岸の松崎に車で抜ける途中、思いがけず古い明治期の学校建築（岩科学校）に出会って感銘を受けたことがある。日本の各地に未だそうした記念すべき建物が幾つか残され保存されていることだろう。明治の『学制』頒布から既に百二十年、先人たちの思いや努力が次第に消え去ろうとすると、単に回顧的ではなく「学校文化のうち、とくに物的な側面に着目して、日本の学校とその教育の特色を」、しかも「未来的展望のもとで、歴史的な背景を探る」意図でまとめられた本書は、とかく制度や学習の内容などに視点を置きがちであったこれまでの教育研究に一つの新しい示唆を与える試みとして注目してよいであろう。

本書は、編者・石附実大阪市立大学文学部教授の他、矢野裕俊同助教授及び同大学院出身の添田晴雄氏、岡本洋之氏の共同研究の一つの成果である。なお、これに年表作成者として院生全 楽氏が加わる。「目次」から構成を見ると、次に掲げるようにユニークな内容になっている。なお、担当執筆者名を敬称略で添えておく。

はしがき （石附）

I 教具から見る学校文化 （石附）

II 建物としての学校 （石附）

III 教室の道具立て （矢野）

IV 文字からみた学習文化の比較 （添田）

V 筆記具の変遷と学習 （添田）

VI 学校をめぐるファッションの文化 （岡本）

近代日本の学校文化誌年表 （全）

あとがき （石附）

いうまでもなく、これらの章は更に具体的に分節され、興味有る諸問題が詳細にまとめられている。例えば、各章を順に一節ずつだけ取り上げれば、「教育観と教具」「学校建築のガイドライン」「教授用具のたどる道—黒板と掛図」「西洋生まれの教授法との出会い」「石盤

対「練習帳」「校章をめぐるファッションの文化」など、いずれも明確にまとめられていて知見を広げてくれるものである。

編者の言葉で研究に至る問題意識をとらえれば、「従来、教育の歴史的な研究においては、教育の思想、制度など、どちらかといえば、ソフトウェアとしての側面の比重が大きかった。」そしてそれは「学校文化のコト的な事項の段階にとどまり、学校文化のモノ的な領域には余り足を踏み込まなかった。しかし、学校とその教育の成立と展開には、モノ的要素すなわちハードウェアがもつ意義もきわめて大きいし、教育の実態は、案外に、そうした物的な条件によって規定されるところが多い」という判断によるものであった。この前半については既に評価したところであるが、後半についても、確かに一般化してまさしくそのように言えるであろう。例えば、今日のコピー機器の進歩と普及は教育現場に情報と手段を豊かに、かつ容易なものとしてもたらして教育の実践を大きく変えている。それは、かつて所謂ガリ板でペンだこを作り、謄写版で手を黒く汚した時代の教育とは、単に教員の労力面だけでなく、学習状況をすら大きく様変りさせているのである。

第1章では、次のような示唆に富む断定がなされている。「教育観は教具に反映し、教具は教育のあり方を左右する。画一的な教育は学習における受身の固定的なあり方をもち、教具の欠乏ないしは欠如の状態を一般とする。他方、多様かつ自由な教育は、逆に、活動、能動、柔軟な学習形態となり、教具を豊富化する。18－9世紀における世界の新教育の潮流にあっては、大正日本の新教育運動にあっては、さまざまな新しい教具の出現があったのもそのゆえんである」と。したがって、筆者は更に「方法、技術への過信を仮にいま技術信仰と表現し、他方、方法、技術を軽視ないし無視して専ら観念に偏り精神至上の立場をとるのを技術アレルギーというならば、日本の教育は、つねにこの両者の分岐的な流れのままに動いてきたといえる」と論じ、「この両者は相即的、統合的に考えられなければならない」として、「教育工学という表現」を越え、「もっと広く、包括的に、教育のテクノロジーとして、教育の総合学を目指すべきかもしれない」と提案する。これはコンピューター導入が教育現場で推進されている今日にあっては、時宜を得た提起といえるであろう。

第2章では、明治10年代における小学校建築が、「上からの指導」「地域の各層による『共立』的性格」そして「地域のセンターとして」という特色を持ちつつ、校舎のモデルに統一的基準がなく、地方独自のやり方で行なわれたことを、いろいろな写真や図版を活用して説明している。また、明治24年の『小学校設備準則』による「外観ノ虚飾ヲ去リ質素堅牢ナラシム」ことを根本としたパターンが明治末年になると「機能上の観点からの見方のほかに『美観』を重んじる校舎への要望も強くなって」きたことを、「美育との関連で構想したものとして、今日の学校にも当てはまる普遍性がある」と注目し、最後に学校建築は「安全、堅牢」「地域のセンターとしての役割」をもち、「ゆとりとムダの空間やレイアウトのあることが望ましい」としている。つまり「機能第1の、コンクリートのかたまりのような学校からは、ゆとりのあ

る教育も人間も育ちにくい」と主張するのである。

第3章では、「授業を成り立たせるもの」として、机と腰掛を近世の寺子屋や欧米のそれと比較してまとめ、西洋では多くの場合、動かせない鉄製の脚の固定式机・腰掛であったのに対し、移動可能性を持った日本の木製のそれが教育上動的なメリットをもたらしたことを注目している。なお、この章の焦点は黒板にあり、その日本での使用の歴史から実際の使われ方に関し広範な言及がなされており、関心を引く。例えば、「教室は児童教育の場所としてきわめて神聖なところであるから、黒板に落書が行われないう、生徒に勝手に黒板を使わせるべきでない」という意見や、逆に生徒にとって見易く書き易くするために可動式の「塗板」の設置勸奨を京都府学務課が布達で行なっていたことが紹介されている。筆者は教具に関する結論としては「使用する目的、時間と空間が制約された状態では、校具・教具と子どものかかわりは深まりにくい。むしろ目的による限定を超えて時間と空間の制約を超えたところで、一見ランダムで無秩序に見える『遊び』のかたちをとって展開される教具と子どもとのかかわりによって、校具や教具が子どもの学習に生きて働く、新しい可能性が生じるのではあるまいか」と述べているが、既に触れたコンピューターや複写機器のほか、OHPなどの活用が盛んになってた今日、適切な見解といえるであろう。

なお、教室の神聖視と黒板の高さに関わって、「教壇」のもつ意味についてはもう少し研究の余地があったのではないと思われる。論中で大正自由教育で唱えられた「教壇の教師から机間の教師へ」という標語との関係で、「教師の権威を象徴する教壇から下りて、子どもと同じ地点に教師が立つことを奨励した」ことが紹介されているが、実は戦後民主主義教育の開始とともに、まさにその象徴的変革として、教室から教壇が殆ど一斉に撤去されたことがあったからである。教壇は、添付された絵や図版などからも、唯一「19世紀半ばのアメリカの教室」という絵を除いて正確には存在が確認されないのが残念である。余談となるが、たまたま教壇の描かれた上記の絵のなかに、教室の前の部分で泣く子どもの姿が見られる。それも積み木様の不安定な台のうえに立たされて明らかに体罰を受けているのであって、興味がひかれる。

掛図への注目点として、広く普及している「世界地図」は、いつごろどのようにして日本を赤く真ん中に置くものになったのであろうか？ 少なくとも、イギリスのグリニッチ天文台で売っている地図はそうではない。日本中心の地図は明らかに日本人の世界像づくりに影響を与えてきたことであろう。かつてレニングラードのピオニール宮殿の集会室で、前面の壁一杯に「ソ連邦」の地図が掲げられ、日本と英国がそれぞれ右下と左上に小さく描かれているのを見たことがある。それは若いロシアの少年少女に大国意識を確実に育てたに違いない。

第4章では、筆者は、中世ヨーロッパの教会で扱われたカテキズムを初めとして、「読み、暗唱する」ことに重点が置かれていた欧米の教育法にたいし、我が国の学習が寺子屋に明らかのように「書く」ことを中心に実践されていたことを注目する。そして、「文字に対する依存性の高い言語である日本語をコミュニケーションの手段としてもつ日本の文化において、手習

いに代表される、文字を『書く』ことを中心とした学習形態はいわば理にかなったものであった」が、『学制』による「『話す』言葉中心である発問法の導入は、文字依存度の高い日本人にとっては負担の大きいものであった」という。そして、「発問法はその後日本では成功しなかったり形式に流れたりしたのである。その大きな原因のひとつがこの言語の問題である」とする。であるならば、今日国際時代にあって、「話す」ことへの学習の転換は、宿命的に乗り越えるべき重点課題ということになるだろう。卑近な一例として、ディベート能力や外国語教育の問題がこれにあたる。

第5章では、まず毛筆からの筆記用具の変遷が興味深くまとめられている。それは、今やシャープペンシルが若者の特に愛好するものとなっており、字形や書く姿勢にまで影響してきているということへの関心からでもある。この点、筆者も言うとおり、毛筆、石盤、鉛筆、そして更に今日のワープロに至るまで、それらの変遷は明らかに書くこととそれに伴う学習に大きな影響を与えたであろうことは否定できない。例えば、ワープロ使用は、劇作家の井上ひさしのような文筆家ですら端的に言うように、明らかに漢字を忘れさせ、自分で正しく形作ることができなくなる傾向を与えていることから、今後の教育の課題にもなりうる。もっとも機械操作による漢字の使用は筆者も言うとおり増えているのであるから、これは亦もう一つの問題であろう。なお、此处への発展の過程で、消えない筆記用具として簡便なボールペンが発明され普及したことも、時代が下がるとはいえ、今後注目されてよいであろう。

学習への影響という意味で、石盤から練習帳への変遷は、今の子ども達に是非とも知らせたい内容になっている。「もともと、石盤は西洋から導入されたものであったが、西洋においてよりも日本において多用されたといつてよい」そうである。それは「文字依存性の強い日本文化とその学習文化」に由来するとされる。この場合、文字は主として漢字を意味するであろう。そのゆえに欧米では今に至るまで大勢を占めるタイプライターが、日本では公文書にまで求められながら、片仮名・平仮名タイプを含め、結局は庶民の使用するところまで行かなかったのである。梅棹忠夫が『知的生産の技術』（岩波新書）のなかで、便利な和文タイプライターの無いことを嘆き、その誕生を強く期待したのが僅か20年前であったことは驚くべきことである。

第6章では、最も具体的かつ社会的に目立つ服装の持つ意味が扱われている。筆者はここでまず、今日卒業式などで女子学生に人気の高い袴姿が、実はドイツ人ベルツ博士の衛生的な観点からなされた勧告によっていたということを紹介している。「女袴の着用は、日本の女性の服装史上画期的なことであった。まず重くて幅の広い女帯がなくなると、上半身が楽になる。また袴の下に着物の裾が乱れても気にする必要がなくなったため、背筋を伸ばして歩けるようにな」ったという。しかし、当時としては、日本の教育界はそれを必ずしも歓迎せず、「旧来の、観賞されるためのものではあっても活動には適さない着流しの着物を着て、優婉な動作しかできない姿に象徴される、柔弱な女性を育てようとする動きも強くあった」ことを指摘する。それは「教育によってめざされた女性像」の問題であったのである。なお、女袴が明治33年以

降急速に普及するのは、逆に「学校が神聖な空間と見られ、そこへ行くのにふさわしい服装とされたから」であり、やがて「国家神道と学校教育の結びつきがスムーズに浸透していく基盤が存在した」ことを意味すると論じている。そうだとすれば、一律の制服が持つ意味は改めて深く検討されねばならないであろう。

この点から言えば、教員の制服がどのような経緯で定められ、どのような教育的影響を与えたかも検討されてよいだろう。評者の調べるところでは、明治期の教員の給与は非常に低いものであったため、寧ろ教員の方から制服の支給を政府に要求したほどだったのである。この点に、教員が一般に政府権力に弱いメンタリティーを持つことになった要因があり、それがまた、結果的に極端な国家主義に走らせたとも言えるであろう。まさに男子教員の制服は、日露戦争時の軍人の服装に近かったのである。

筆者はまとめとして、「この『文化による無言の教育』の中身は、明治・大正期を通じて、基本的なところでどう変化したのか。その後の時代にはさらにどう変化して、現代の私たちの精神文化につながってくるのか。」「これらの課題を今後もさらに追究していきたい」と述べている。その言や良し。評者が若干文中で指摘したことを含め、更に広く具体的にまとめられることを期待する。

以上、多少型破りな解説的書評となったが、最後に、三人の筆者たちの関心と努力は、読む者を十分触発するものとして、あらためて高く評価したい。

(思文閣出版刊、1992年6月発行、A5版264頁、定価2,369円)

